
永遠の春の花

樹林

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

永遠の春の花

【著者名】

ZZマーク

239900

【作者名】

樹林

【あらすじ】

ある日転校生がやってきた。転校生は同じクラスである春花に「君を守る」と告げるのであった。そして転校生は無事に春花を守ることが出来るのだろうか？

(前書き)

登場人物

西木宇都宮 東城京 春花
西木宇都宮 東城京 春花
西木宇都宮 東城京 春花
西木宇都宮 東城京 春花

西木宇都宮 東城京 春花
西木宇都宮 東城京 春花
西木宇都宮 東城京 春花
西木宇都宮 東城京 春花

西木宇都宮 東城京 春花
西木宇都宮 東城京 春花
西木宇都宮 東城京 春花
西木宇都宮 東城京 春花

学園の寮の一室で、一人の少女が日記を書いていた。

長い髪を後ろで一つに縛り、クリクリした大きな瞳で、整った可愛らしい顔の子。

可愛らしげペンを片手に、可愛らしく日記帳に今日の出来事を面白おかしく書いている。

時折今日の出来事を思い出したのか、クスクスと小さく笑い出す。そして笑い出したかと思えば、次は頬を赤く染め、恥ずかしそうに窓から見える夜空を遠い目で眺めていた。

「春花お風呂空いたよ~」

そんな事を言いながら、相田春花の肩をポンと叩いた。

春花は一瞬ビックリしたのか、体を震わせた。だが、次の瞬間に手紙の内容を読みまといと、体を使って覆いだした。

「手紙なんて読まないよ。そんな事より明日も早いから、早くお風呂に入つておいで」

「絶対見ないつて約束する?」

春花は寮のルームメイトである西木麻奈美と毎日の日課のようになじ事を繰り返し言つていて。昨日も春花は麻奈美に同じ事を言われ、春花もまた麻奈美に同じ事を言つた。

「約束するつて。なんなら脱衣所まで持つていけばいいじゃない?」

…

麻奈美は少し呆れた口調で言つた。

だが、春花は日記帳をたたみ机の引き出しに閉まつた。

「麻奈美ちゃんを信用するよ」

それも春花と麻奈美にとつては何時もの事だつた。

「それなら早くお風呂に入つておいで、お湯がぬるくなるよ」

「うん」

それだけを言つて春花は脱衣所に向かつた。

「信用されているつてものも辛いね」

春花が脱衣所に入つたのを確認して麻奈美が呟いた。

それでも麻奈美は春花との約束を守り、日記帳を見る」ことはない。それは見たく無いと言えば嘘になるが、春花が何時か見てもいいと言つてくれる日を待つてゐるからだ。

次の日の朝。

「ほら、早く起きないと遅刻しちゃうぞ~」

少し間の伸びた声と共に麻奈美は春花を起こし始めた。

時間は遅刻まで三十分をきり、一般的に言えば非常に危険な状況だ。

だけど麻奈美は実力行使で起「そうとはしないで、あくまで優しく体をゆするだけだつた。

「ん~もう少しだけ……おねが~い……」

そして春花もまた刻一刻と時間がせまつてゐるにも係わらず、まだ小さな寝息と共に今にも深い眠りに付きそうだつた。

「だ~め。早くしないと」飯食べられないぞ~」

麻奈美はそうは言つたものの、軽い口調なので説得の力ケラもない。

だけど春花にとつてはどんなに凄い説得だつと、「」飯食べられない」の一言で大丈夫だつた。その証拠に麻奈美が言つた瞬間に目を開けて、さつきまでの春花とは比べ物にならないぐらい俊敏だつた。

「朝ご飯が食べられないなんて絶対だめ~！」

布団を思いつきりどかし、次の瞬間にはベッドから降りて着替え始めた。

麻奈美は春花を見て苦笑したが、さすがに時間もギリギリだつたため、寮の机に置かれた麻奈美自身が作つた料理を先に食べ始めた。春花も直に着替え終え、素早く朝食を食べて麻奈美にお礼を言つ。そして洗面所に向かつた。

洗面所の一角にはクシや歯ブラシといった日常に使つための道具が置かれている。

春花は忙しそうに顔を洗い、クシで髪を梳かすなどの普通の子と同じような事をした。かといつても時間がないため、普通の子より雑で適当だつたりする。

「もう準備終わつた?」

朝食を食べ終えたのか、麻奈美が後ろから声をかけてきた。

麻奈美は手に学校指定のバックを持っていて、チラチラと腕にさめている時計を見始めた。こんな時の麻奈美は時間がない証拠だ。

「うん、終わつたよ」

最後にタオルで手を拭いて、部屋に置いてあるバックを持つ。

「ほら、早く~」

玄関から聞こえる麻奈美の声は、やはりと言つていいほど慌てたようには聞こえなかつた。

「うん、今行くよ」

春花と真奈美はギリギリで遅刻は逃れたが、走つてきたこともあり二人は朝から疲れ果てていた。

やがて担任の先生が教室に入つてきた。

「え~、突然だが転校生がいる」

先生は教室に入つてくるや否やいきなり言つてきた。

当然のごとながら教室はざわめき、クラス皆の期待が高鳴つた。

「それじゃあ、東城入つてきなさい」

先生はそう言つと、教室のドアが開かれる。

今の中には春花には疲れて転校生の顔を見る力も残つてはいなかつたが、教室中の女子から漏れる声に気になり春花は教卓の方を見た。

そこには背が高く、長い足、漆黒で吸い込まれそうな瞳、少し長い髪が自然に垂れて、顔のどのパートも整つている人が立つていた。

「東城京です。これからよろしくお願ひします」

京は軽くお辞儀をした。

顔を上げるや否や、教室中を一度見渡した。その瞬間京はある人の前で視線をとめる。

クラスの生徒も京の視線が誰に向かれているのか気になったのか、振り替え始めた。

京が視線を送っている当の本人である春花は何事か分かつてないのか、不思議そうな顔で辺りを見渡し始めた。

「ん？ 相田と知り合いか？」

「いえ、何でもありません」

表情を変えず、きりつとした顔で言った。

「それじゃあ、後ろの開いている席に座つてくれ」

京は何も言わずに、指定された席に向かつて歩きだす。

すれ違う人は京の美貌を近くで見ようと、通り過ぎても視線を送つたりした。

京は席についたところで、先生が今日の日程などを話し始める。だが、クラスの生徒は日程などより京の方が気になるようすで、凝視する生徒もいればチラチラと見る生徒もいた。

そんな中でも京は表情一つ変えず、きりつとした顔で先生を見ていた。

ほどなくしてチャイムが鳴り、先生が教室から出て行つた。それを待ち構えたかのように、春花を除いてクラス中の女子生徒が京の方に近寄り始めた。

だが、京は女子生徒の間を器用にすり抜け、春花の元まで行つた。「すまない、少しだけ時間をくれないか？」

やはりここでも京の表情は変わることはなかつた。傍から見れば京は表情を変えられないのかと思わせてしまつかもしれない。それほど京は表情をえないのだ。

京の表情とは正反対に春花は驚いた顔をしていた。

勿論クラス中の生徒もいつたい何が起こるのかとワクワクしている人や、嫉妬している女子がいた。

「えつ！？ ど、どうして私なの？」

「無理なのか？」

春花の答えにはなつてなく、京の中では行くか行かないかの事しか頭になかった。

「い、行きます」

「そうか、ありがとう」

京はそれだけを言つて、スタスタと歩き始めた。

春花も慌てながらも京の後ろについていく。

その二人を見送るよう、クラスの生徒は呆然と二人の後姿を見ていた。

京が春花を連れてきた場所は屋上だった。

季節は夏だけあり、暑い日差しが二人を照らしていた。

「それで、私に何か用なの？」

少しの沈黙の後に春花が強い口調で言つた。だけど口調とは正反対に春花の顔は緊張によるものなのか、少し強張っていた。

「その様子だと俺の事は覚えてはないのだな」

表情は変えてはいけないが、京の声はどこか悲しそうな声だった。

春花はいつたい何を言つているのか分からぬのか、首を傾げている。

「それって」

そんな時、何処からともなく一人の少女が今日の後ろに現れた。いや、現れたというより気づいたらそこにいた。こちらの方が正しいのかもしれない。

少女は京に抱きつくなり、すりすりと頬を京の背中でさすり始めた。

「京ただいま」

「ん？ ああ、涼香か。仕事の方は済んだのか？」

特に慌てる様子もなく京は言った。

涼香は長く綺麗な髪、瞳は黒というより灰色に近い色、春花とは違つた美しい顔、小鳥のような綺麗な声。傍から見れば京が王子様

で、涼香が王女様のように見えなくはない。それほど涼香は美しかった。だけど、その美しさは涼香の態度で全てを台無しにしていた。何も言わないでじつとしているなら、異性どころか同姓の人も見惚れてしまうかもしれない。別の言い方をするなら、憧れや目標の人なのかもしない。だが、涼香は人一倍元気な子で、常に京の側で何かをする少し落ち着かない子だった。

勿論何も知らない春花は、とんでもないものを見たとオロオロし始めた。

「うん、終わったよ。なんかね、報酬の割には簡単な仕事だったよ」「そうか、なら報告書を早めに書いて提出してくれ」

「えー、それだけなの？ 何時ものあれやつてよ～」

「ああ、分かっている」

京はそれだけを言つと、涼香の頬を少し持ち上げて柔らかそうな唇にキスをした。

京と涼香がキスをしている姿を横から見ている春花は、誰かがキスをしているのを近くで見たことがなかつたため、頬を赤く染めて後ろに振り返つた。

春花の気持ちとは裏腹に、京と涼香のキスはティープなものに発展し、時折聞こえる声が春花をより刺激にさせていた。

「ん～……それで、その貴女は誰です？」

ようやくキスを終えたのか、涼香が少し怒つたような口調で言つた。

春花は涼香の方に振り返る。

「彼女とは何でもない」

春花より早く京が言つ。

「あつ、その事なのですが。『俺の事は覚えてないのだな』って言つていたのはどういう意味だったのですか？」

「君が覚えてないのなら関係はない」

春花の疑問に京は答えるつもりはないようだつた。

だが、そこまで言われれば誰でも気になつてしまつだらう。

「それだと気になるんです！ お願いですから教えて下さいよ」「む……仕方がない。それなら一度しか言わないから記憶してくれ」「あつ、はい」「

一人取り残された涼香はいじけたのか、頬を膨らませて屋上のフェンスによしかかった。

「なら最初に、日食で思い出す事はないかな？」

「日食ですか？……そうですね、過去に一度だけ日食を見たことはありましたが、特に何かがあつた覚えがないですね……あつ、一つだけありました。確か誰かが背後から襲ってきて、それを知らない誰かが助けてくれた事がありました」

「そう、それだ。その助けた人が俺と涼香だ。」このさいだから言つとくが、君は命を狙われている。しかも不特定多数に。理由は俺も知らないが、俺はある人から君を守るために依頼された。一応本職は殺し屋だが、ギャラによつては汚い仕事だろうと何でもする。ここまで分かつてくれたか？」

京がそう言つた時の春花の表情は、何を言つているの？ 貴方達は馬鹿ですか？ と、言わんばかりの表情をしていた。勿論普通の子なら殺し屋なんて職業を信じる人なんていないだろう。だが、実際京と涼香は一流の殺し屋なのだ。

「まあ、なんとか。だけど仮に本当に命を狙われているなら、どうして私を襲いにこないのですか？」

「それについては俺たちが日夜君を守つてているからだ」

「はあ）……それじゃあ何故学校に転校を？」

「うむ、鋭いところについたな。よくよく考えれば、影から守るよりも一緒にいる方が助けやすいと思い、わざわざ転校君と同じ学校に転校してきたのだ」

「えーっと、見た目よりお馬鹿さんなのですね

春花は苦く笑いながら言つた。

「君は命の恩人に対して酷い事を言うな

そうは言つたものの、京の表情は変わることはなかつた。

「す、すいません。だけど正直なところ信じていいのか分からなくて……」

「平和ボケしている現代の子にはもっともな意見だろう。だがな、今言つた事は本当なのだ。実際に向こうの建物から、今も君をスナイパーライフルで狙つているぞ」

京はそう言って屋上から見える建物を指差した。
そこからは太陽光の反射で光つてゐる一つの光がチラチラと見えた。

「あつ、だ、だけど大丈夫なんですか！？」

ようやく事の重大さが分かつたのか、春花は慌て始めた。

「いや、大丈夫ではないだろう。さつきまではこちらの様子を見ていたのが、こちらが気づいた事を知つて向こうも慌ててゐる頃だろう。だからそろそろ撃つてくると思うぞ」

だが、京は平常心のままだつた。

京は死ぬのが恐くないのだろうか？ はたまた何か秘策があつての余裕なのだろうか？ どちらにせよ京は全く慌ててゐるようには見えなかつた。

「そ、それじゃあ逃げないと！！」

「慌てることはない。涼香を見る、さつきからスナイパーライフルで相手を狙つてゐるから、相手が引き金を引こうとすれば相手の頭が吹つ飛ぶ。だから何も心配はいらない」

さつきまでの涼香はフェンスによしかかつてゐたのだけれど、何時之間にか何処から出したのか分からぬスナイパーライフルで相手を狙つていた。

春花は始めて見る本物の銃を近くで見て、小さく体を震わせた。

「どうした？ 銃がそんなに怖いのか？」

春花が体を震わせたことに気づいたのか、京は平然と言つた。

「あ、当たり前じやない！ 当たつたら死ぬかもしれないのよ！！」

「そうだな、当たれば死ぬかもしれない。だが、当たらなかつたらタダの鉄の塊にすぎない」

「そ、そうかもしれないよ…… だけど危ないじゃない……」

「そのために俺たちがいるんじゃないか。俺と涼香は今までに幾度となく君を助けてきた。それはこれからも同じだ。だから何一つ心配はいらない」

「し、信用してもいいの？」

「それは君の勝手だ。信用されようがされまいが、君を助けているのには全く関係はない。だが、安心はしてもいい」

「……うん。それじゃあお願ひ……します。まだ死にたくないよ……」

春花はそう言って、京に抱きついた。そして春花の白い頬に一粒の涙が流れた。

「ああ、分かつていて。そのために俺達がいるのだからな」京が言い終えたのと同時に、辺りに鈍い音が響いた。

「目標完全に沈黙した。それよりも私が君たちを守っている間に、なにイチャイチャしているのかな？」

スナイパーライフルを思いつきり握り締め、涼香は眉間にシワを寄せながら言った。

「それは違うな。この娘が勝手に抱きついたにすぎない」

やはり当たり前のようになると答える。

「ちょ、ちょっと…… 本当かもしれないけど、もつと気の利いたこと言えないの……」

春花は京から離れ、少し怒鳴ったように言った。

「そんなことして何の利益がある？」

「女の子に嫌われてもいいの……」

「別にかまわない。誰かに恋心を抱けば仕事の邪魔にしかならないからな」

春花は大きなため息をついた。

「はあ…… そんなので生きていて楽しい？」

「いや、人を殺している時点で楽しいという感情はない」

「そ、それはそうかもしれないけれど…… だけどさ、誰かを好きになるって事は大切だと思うよ」

その時の京は初めて表情を変えた。

不思議で、初めて聞く言葉のような顔だった。

「何故だ？ それは生きていいく中で大切なのか？」

「当たり前じゃない！ なら如何して東城くんは涼香ちゃんにキスをするの？」

「涼香が望んだことだからだ」

「それじゃあ、私が抱いてつて言えば抱くの？ 私がキスしてつて言えばキスするの？」

「ああ、それが君にとつて必要なじょう」「あ～、もう！ 信じられない！！ ばかっ！！！」

春花はそれだけを言つてスタッタと屋上から出てつた。

取り残された京は呆然と立つているだけで、いつたい何が言いたかったのか分からぬと言わんばかりの顔で春花が出てつたドアを見ていた。

「いつたい相田春花は何を言つていたのだ？」

「あの子が言つていたことが分からぬようじや、何時まで経つても普通の子を理解出来ないかもね。まあ、私は京さえいれば関係ないけど」

さつきまで持つていたスナイパーライフルが今は何処に締まつたのか、今は何も持つてなかつた。

「それなら理解することもないだろう」

そう言つて京も教室に戻るため、歩き出した。

教室に戻つて授業を受けている春花は、何時ものように集中して話を聞くことはできなかつた。それもそのばず、今日転校してきた人に「君は命を狙われている」といきなり言われれば何時も通りにいられるはずもなかつた。

何か物音がすれば敏感に反応し、外で何かが動けば確かめる。さつきから春花はそれの繰り返しだつた。

ようやく授業終了のチャイムが鳴り響き、担当の先生が教室から

出るや否や、春花は京の方に歩き出した。

春花は思いつきり京の机を手の平で叩いた。

教室中に響き渡る音で、クラスの生徒が春花と京に視線を送った。

「東城くん、ちょっとといいかな？」

眉間にシワを寄せて、何時もの春花なら絶対にしない表情だった。

「つむ、よからう」

京の返事を聞くなり、春花は京の腕を取つて教室から出でつた。朝の事もあり、クラスの生徒は興味津々で噂話を始めた。

廊下の端にまで京を連れて行き、春花は辺りに人がいないことを確認する。

「それで、本当に私を守つてくれていたの」

春花は声を殺しながらも怒鳴りながら言った。

「むろんだ。いつ何時でも俺達は君を守るのが仕事だ。何もしてないよう見えるが、実際は君を常に監視し、守つている」

「そ、それってお風呂に入つている時も？」

まさかそんな事はないだろうと、思いながらも春花は恐る恐る言った。

「いや、俺達はプライバシーを守る主義だ。だから安心して風呂なりトイしなりすればいい。あつ、そつそつ君に渡さなければならぬ物があつたのだ」

京は制服の後ろズボンに隠してあつた小型式のハンドガンを取り出した。

「これは殺傷性の少ないタイプだが、力のない君でも楽に扱えると思う

「い、いらぬ」

春花は怯えているのか、少し涙目で首を左右に振った。

京は春花が怯えていることに気づいてなく、ただ単に殺傷性が低いから使えないと勘違いしていた。

「む、中々図々しい娘だな。仕方がない、それなら俺が愛用している銃を渡そう」

そして京は制服の内側に隠してあったゴツイリボルバータイプの銃を取り出した。

「これなら殺傷性は高く、体の何処に当たっても致命傷になる。だけど一つ問題があるとするなら、かなりの重量があるから女性の君には少し厳しいかもしれないな」

「い、いらない」

さりに春花は怯えてしまった。

「ん~、なら銃がいらないと言つならこれをやるわ」

京は制服のポケットにしまいこんであつたボタン式の器具と、シリバーのブレスレットを取り出した。

「このボタンを押せば凄い光が出て、相手をひるませる」とが出来る。ブレスレットは君の現在位置がわかるから、俺たちにとっては好都合だ。これなら銃がなくても安心できるだろ?」

さっきまでの物騒な物から一変して、安全そうな物だったから春花は潤んだ瞳のまま受け取った。

「ありがとう……」

「いや、気にするこことはない」

「それよりも東城くんは何時もそんな物を持ち歩いているの?」

「当たり前だ。俺の職業をなんだと思っている。いつ何時死ぬか分からぬ生活だから、寝るときも風呂に入る時も持ち歩いている」

「もし警察に見つかつたらどうするの?」

「決まつていい。俺に不利な状況なら構わぬ射殺する」

「それじゃあ、今までに……」

春花は想像していた。

警察に捕まつた京が、銃を取り出して撃つている姿を。

そんな光景を想像するだけで、春花は恐ろしく思えた。

「いや、残念な事に今まで一度も見つかつた事はない」

春花はその返事を聞いて内心ホッとしていた。

「それなら良かつた」

「どうしてだ?」

「それなら良かつた」

「そりゃあ、仮に警察を殺していたら人殺しになるじゃない」

「君に何度も俺の職業を言えば分かってくれる？俺と涼香は殺し屋だ。今までに数えられないほどの人を殺してきたのだぞ。さつきも一人殺したばかりではないか」

「人を殺すことを当たり前に京は言った。

もちろん人を殺す事に慣れるわけのない春花にとってはショックな事だった。こんなにも身近に人殺しがいたことや、こんなに素敵な人が殺し屋のことについてだ。

「そうだったね……だけどさ、私を守る時は人を殺さないって約束して」

「分かつた君が望むならそうしよう。だがな、理由だけでも聞かせてはくれないか？敵を殺さなかつたら君が今以上に危険な立場に陥つてしまふのだぞ」

「私のために誰かが死んでしまったのは悲しくて……」

「そう言つた時の春花は本当に悲しそうだった。

殺し屋という職業についている京にとつては謎めいた言葉だった。殺される前に殺せ。

隙を見せずに気迫を見せる。

情けをかけるな。

常に神経をシャープにしろ。

京は小さい頃からそれだけを聞かされて育つてきた。だから一般的な感情や情けは、京にとつては必要のない事だった。

「そうか、俺にとつては誰が死のうが関係のない事だが、それで君が困るのなら受け入れよう。だが、やむをえない場合は構わず殺す。それだけは分かつてくれ」

「うん、その時は仕方がないね……」

「理解してくれて礼を言おう。俺は忙しい身だから、これで行こうと思っているの。他に聞いときたい事とかはあるか？」

「ないです」

「そうか、それではこれで失礼しよう

京はそれだけを言って何処かに向かつて歩き出した。

「これからどうなるんだろ？……」

春花はそう呟いて、教室に向かつて歩き出した。

春花にとつて世界が一変する事態の今日、ようやく授業が終わつたのだが、春花は担任の先生から頼みごとをされてしまった。そのため、帰りが遅くなり、道行く何処にも人影がなかつた。

「む、どうしてこんな時に一人なのよ？」

辺りをキヨロキヨロト見渡しながら春花は呟いた。恐怖のあまりか春花の足は小刻みに震えていた。

「東城くーん！涼香ちゃん！いたら返事してーーー！」

今日の朝方に京から聞いたことを思い出し、春花は叫んだ。が、春花の叫びは虚しく少し肌寒い風が体の体温を下げるだけだつた。

「東城くんの嘘つき……」

春花は不安のあまり薄つすらと瞳に涙が溜まつた。

「そこのお譲ちゃんは相田春花つて子だな？」

「えつ？」

春花の後ろから団太い男の人と思われる声がした。

いつたい誰だろうと思い、春花は振り返つた。

そこにはいかにも海の男と思わせるような団体のやうな三十代後半の中年男性が立つていた。

「へ、中々可愛い顔しているじゃねーか。こんな子を殺すなんて勿体ねー」

薄つすらと笑みを見せながら男は言った。

春花は恐怖のあまりに後ずさる。だが、なんとも皮肉なものどうか、春花の後ろには芝生状の坂があり、足を滑らせた春花は落ちてしまつた。

頭を地面にぶつけて、薄れゆく意識の中で春花は男の人とは別の人影が見えた。それが敵なのか、味方なのかは今の春花には検討が

付かず、そのまま春花の意識はなくなつた。

春花が意識を取り戻した時には辺りは暗く、街灯の電気が辺りを照らしていた。

ベンチに寝かれ頭の頭痛を我慢し、春花は今の状況を考えた。だけどその考えは直に終わつた。何故なら春花が寝ているベンチの直隣に京の姿があつたからだ。

「東城……くん……いつたい私はどうなつているの？」

「ああ、説明しよう。君はヒットマンに襲われそうになり、恐くなつたのか後ずさつた君は坂から転げ落ちて意識がなくなつた。そして俺はヒットマンを丁重に返して今に至る」

「殺してないよね？」

「君が望んだ事だからな。だが、今後係わらないように引き腕は使い物にならないようにはしといた。もちろん日常生活では支障をみたさない程度なのだけだな」

「それなら良かつた……ありがと」

春花は立ち上がりうつと、ベンチに手をかける。だが、体に力が入らないのか再びベンチに横になつてしまつた。春花が気絶している間にかぶせといた京の制服が無残にも地面に落ちる。地面に落ちた制服を京は拾つた。

「力が入らないのなら手伝おう」

「ははは、私かっこ悪いな」

春花は苦く笑うしかできなかつた。

「そんな事はない。涼香と比べたら力がないかもしれないが、人それぞれだ。君は何も気にすることはない」

そして京は春花を軽くお姫さま抱っこで持ち上げる。そのまま学園の寮に向かつて歩き出した。

春花にとつて始めての行為だつたため、頬は少し赤く染まつた。

「なんか恥ずかしいね……」

「どうしてだ？ 涼香は何時もこれではないと怒るのだが？」

「なんか恥ずかしいね……」

「どうしてだ？ 涼香は何時もこれではないと怒るのだが？」

「ははは、涼香ちゃんは中々ロマンチストなんだね」「よくは分からないが、嫌なら止めよう」

「嫌じやないよ。私も一度はこんな風に抱っこされたかったもん」

「そうか、ならいいのだが。それよりすまなかつた」

京は突然謝りだした。

何時もはきりつとした表情だが、今は本当に申し訳ないと思われるような顔だつた。

「何が？」

「君を守ると言つときながら危険な目にあわせてしまつた。本当に申し訳ない」

「別にいいんだよ。結果として助けてくれたじゃない」「だがな」

「もういいの。もし本当に謝つていいなら、これからは絶対に私を守つてくれる？」

「ああ、約束しよう。必ず君を守る」

「絶対だよ？……少し眠くなつちゃつた。寮につくまで寝ていいかな？」

春花は小さく欠伸をしながら言つた。

「ああ、君が望むのならそうすればいい」

目が閉じようとした時に薄つすらと京の表情が春花に見えた。春花にとつてはその時の顔は今までに見せなかつた優しい顔が、何時もの何十倍も魅力的に見えた。

「うん」

それだけを言つて春花は眠りについた。

今の春花における状況よりも、今の状況が良かつたから春花は自然に笑みがこぼれた。

そして春花は望んだ。

どれだけの時間がかかつてもいいから、早く普通の生活に戻りたい。

(後書き)

最後まで読んでいただきありがとうございました。

この作品は結構前に書いたものです。

もし、意見や感想がありましたら、どんどんトロイ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3990c/>

永遠の春の花

2010年10月8日15時38分発行